

大きく貢献している。そして観光面であるが、「龍泉洞の水」販売により岩泉町や龍泉洞の知名度が上がリ、誘客に子かがあったとされている。しか

し岩泉町や龍泉洞の観光客は年々減少している。そのため、「龍泉洞の水」は本当に誘客効果があるのかどうかを改めて検討する必要がある。

東京都心に立地する都道府県自治体アンテナショップの機能

山田 亜理紗

ここ数年、東京では地方の各自治体が次々とアンテナショップを出店し、情報誌や新聞などでも取り上げられ、賑わっている店舗も少なくない。しかし、一口にアンテナショップといっても、その内容や場所は多様であり、「高い家賃を払ってまで、運営する効果はどのくらいあるのだろうか？」という疑問がわく。

そこで本論文では、アンテナショップが登場した過程から、現状を全体的な視点で調査し、アンテナショップの存在価値を考え、今後の行く末を考察した。

現在東京周辺ある自治体アンテナショップの数は50ほどで、立地は都心5区が圧倒的に多い。また、県単位の出店は平成に入ってからであり、平成7年の農産物の輸入規制緩和や、平成14年あたりの昔から各都道府県が観光案内所をおいていた東京駅八重洲口の国際観光会館と鉄道会館の閉鎖等から、アンテナショップは急増した。

また、アンテナショップを機能別に、物産品販

売重視・多店舗展開型、情報提供限定型、オーソドックス型、多機能型、イベント重視型の5つに分類し、富山・新潟・愛媛香川・島根・福井などの店舗で聞き取り調査を行なった。そして、一日に千人以上訪れ、年間売り上げが億単位の店舗は少なくないということが判明したが、年間の家賃だけで数千万円かかり、人件費なども考えると、ほとんどの店舗は多額の県の補助金なくしては成り立たないことがわかった。それでも、お金では表せない効果があるという。その中で最大の効果は、メディアに店舗のことを取り上げられ、お金をかけずにアンテナショップや、物産品、さらには県の宣伝ができることにある。

しかし、目には見えない効果を相手にし、財政事情によってはいつまで続けていくかわからないという声も聞かれた。そうはいつでも、地方経済の活性化や癒し・健康志向の中で今しばらくはアンテナショップの勢いは衰えないだろう。

諏訪の風車と風

藤森 芙美香

長野県にある諏訪湖の南岸の地域には、1900年代初頭から1930年頃まで、最盛期には3000期に及ぶ風車が見られたという。先行研究や、郷土記録、聞き取りなどをまとめると、この風車は、田の肥料として利用された窒素分を含む地下水のくみ上げ用に作られ、構造は垂直固定式で、この地域で卓越するNW-SE方向の風を受けるようにして設置されていたという。だが、見回りの手間や化学肥料の普及に伴い減少し、今現在ではその存在を知る人も少ない。

地下資源や利用目的など、様々な視点でこの

風車を捉えることができるが、1901～1930年当時、1日1回10時、風向8方位の上諏訪観測所の気象記録を中心に‘風’と風車の関係を考察する。

当時の10時、風向8方位の気象記録を整理すると実際にNW-SE方向の風が卓越することがわかった。また、風の吹き方が変わっていないものとして、現在の毎時、16方位の気象記録とアメダスデータと比較すると、1日を通してNW-SE方向の風が卓越している。これにより、風車の向きと卓越風の向きが一致していたことが確

かめられた。また、風向をさらに詳しくみると、真NW、真SEでとはならず傾いており、それを地形の影響から考察すると、その傾き方と、場所による風車の向きの違いが一致した。さらに、同一の場所でもNW風とSE風の傾き方は、対称とはならない。風車の向きはNW風の傾きに一致していることから、設置する際にNW風を優先していたことが考えられる。これは1日を通して類

度は同じでも、NW風のほうが風速が大きいこと、主に昼間に吹き風車の見回りの際に効率がよかったからだと思われる。効率面からすると、特にNW-SE風が卓越する、湖風の影響力が強い場所が風車に適していると考えられ、分布図にもその傾向が見られる。

突風の影響の考察が今後の課題である。

大規模宅地開発にみる「緑」のすり替え

吾郷 かおり

雑木林で覆われていたはずの場所がある日、赤土剥き出しの様相を呈する。そこは後に“緑豊かな街”として生まれ変わる。“緑豊か”の指標はどこにあるのか。

本論文は、1997年3月に街びらきが行われた、東京都八王子市南部に位置する八王子ニュータウンをとり上げ、開発によって奪われた旧来の“緑”と、土木行政が新たに造り出す“緑”との整合性を探るものである。

開発主体である旧住宅・都市整備公団は各種募集案内パンフレットで、緑の豊かさの根拠として「公園緑地」の割合の高さを掲げている。この公園緑地は更に公園、緑地、緑地的施設用地の3種に区別されていることから、このうちまず公園に対してどのくらい“自然”を感じるか等の住民アンケートを行った。

方法は投函葉書の返送によるもので、327通(回収率3割強)の回答を得た。既研究にもある通り全体的に旧住民に比べ新住民の方が満足度は高いという結果が得られた。また、かつての里山を知る旧住民にはそれらの残し方の是非という点で満足度が異なるという意見のほか、転居を後悔しているとの新住民の感想も寄せられた。

そのほか、上記アンケートの中で紹介を受けた、

旧住民を中心として1991年からニュータウン内に唯一残された緑地の保全活動を行っている『宇津貫(うつぬき)みどりの会』で参与観察を行った。ここでは緑地および緑地的施設用地について聞き取り等を行った。公団が謳う“緑の環境軸”など形成されると思えないなど、緑地の造られ方に対する好意的な意見はほとんどなかった。

また、みどりの会での拝借資料等からは、住民説明の場における開発側の「公園緑地」と「公園」の混同使用、「公園緑地“等”」、ゴルフ練習場さえ含まれる「緑地的施設」などに衣われる、曖昧な言葉の使用が垣間見られた。

各種文献からは、土木の世界では「二次林=既に人為の加わっているところ」として当たり前のように開発の対象となるという概念がまかり通っているなど、広義での都市計画や緑地計画においても“緑”の定義が不十分なものとなっていることが明らかになった。

様々な価値観を有する人々あるいは組織の中で、言葉の定義の共有が図られないまま進められる開発の危うさを感じるとともに、今後、元の緑をやっかいものとして捉えるのではなく、“宝”としてみる目が行政の側にも養われていくことが望まれる。

高齢者福祉施設におけるボランティア活動： 板橋区特別養護老人ホームみどりの苑を事例として

上村明子